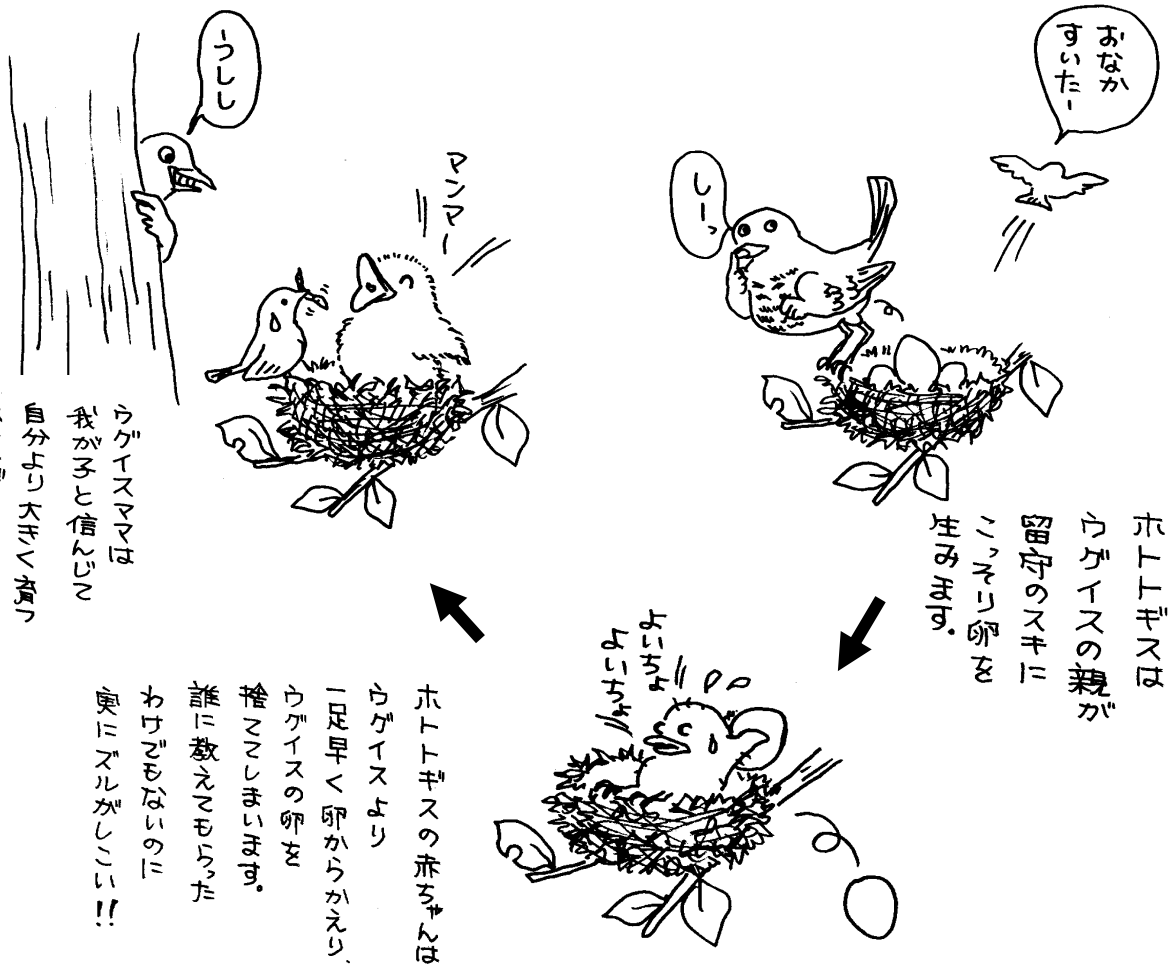
こすずめの里だより

第3号

ホトトギス　鳴かぬならどうする？

5月5日の立夏から、暦のうえでは夏となります。薄い和紙を貼り付けたような春の空から、澄み切った抜けるような青空へと、次第に移り変わってゆきます。

「目に青葉　山ホトトギス　初ガツオ」と詠われるように、夏の到来を知らせる鳥としてホトトギスがいますが、ここ小雀公園でもその姿が観測されています。キョッキョキョキョキョキョキョという鳴き声は「テッペンカケタカ」や「特許許可局」とも聞こえます。また夜に鳴く鳥として珍重され、初鳴きを誰よりも早く聞くために、夜通し待つ姿が枕草子にも描かれています。

ホトトギスはインドや中国で越冬し、ウグイスが繁殖をする5月頃に日本へ渡ってきます。なぜウグイスの繁殖期に合わせるかというと、ホトトギスは自分で子育てをせず、ウグイスに托卵（たくらん）するからなのです。他人に子育てをさせるなんてズルいなあと思われますが、他の鳥と比べて体温変化が大きく、孵化をさせるのが難しいため、自分では卵を温めないという理由も一説にはあるようです。

日本に現存する最古の万葉集の中でも詠まれていたり、先に用いた「目に青葉…」の川柳のように、ホトトギスは古来より親しまれている鳥ですが、もっとも有名なホトトギスを用いた川柳は、三人の天下人の性格を後世の人が表した「なかぬなら　殺してしまへ　時鳥（ホトトギス）」（織田信長　短気）、「鳴かずとも　なかして見せふ　杜鵑（ホトトギス）」（豊臣秀吉　策士）、「なかぬなら　鳴まで待よ　郭公（ホトトギス）」（徳川家康　忍耐）というのがよく知られています。さてあなたはどのタイプ？